

佐高信の緊急対論50選・人の巻

誰が平和を 殺すのか

佐高信

七つ森書館

佐高信の緊急対論50選・人の巻

誰が平和を殺すのか

佐高信

七つ森書館

佐高 信（さたか・まこと）

1945 年山形県生まれ。慶應義塾大学法学部卒業。高校教師、経済誌編集長を経て、現在、評論家、「週刊金曜日」編集委員。おもな著書に『未完の敗者 田中角栄』（光文社）『安倍政権 10 の大罪』（毎日新聞社）、『佐高信の百人百話』（平凡社）、『世界と闘う「読書術」』（佐藤優と共著、集英社新書）、『飲水思源』『現代日本を読み解く 200 冊』（ともに金曜日）、『西郷隆盛伝説』（光文社知恵の森文庫）、『福沢諭吉と日本人』（角川文庫）、『昭和 こころうた』（角川ソフィア文庫）、『昭和恐慌の隠された歴史』『民主党の背信と小選挙区制の罪』『竹中平蔵こそ証人喚問を』『自分を売る男、猪瀬直樹』『自分を売らない思想』『自民党首相の大罪』（いずれも七つ森書館）など。

佐高信の緊急対論 50 選・人の巻 誰が平和を殺すのか

2014 年 11 月 1 日 初版第 1 刷発行

編著者 佐 高 信
発行者 中 里 英 章
発行所 七つ森書館

東京都文京区本郷 3-13-3 三富ビル
電話 03-3818-9311 FAX 03-3818-9312
振替 00170-1-37996
<http://www.pen.co.jp/>
nanatsumori_mail@pen.co.jp

印刷製本 精文堂印刷

定価 1200 円＋税

落丁、乱丁のさいは、お取り替え致します。

©Makoto Sataka 2014 Printed in Japan

ISBN978-4-8228-1418-2 C0036

JASRAC 出 1413143-401

JPCA

日本出版著作権協会
<http://www.e-jpca.com/>

本書は日本出版著作権協会（JPCA）が委託管理する著作物です。
複写（コピー）・複製、その他著作物の利用については、事前に
日本出版著作権協会（電話03-3812-9424, e-mail:info@e-jpca.com）
の許諾を得てください。

佐高信の緊急対論50選・人の巻

誰が平和を殺すのか 目次

はじめに 佐高信 8

巻頭スペシャル対論 亀井静香が問うニッポンのいま 亀井静香 13

第1章 国家の嘘を見抜く 53

『神聖喜劇』にみる上級者無責任論 大西巨人 55

こんなにもバカにされているのに、なぜ? ピーター・バラカン 65

「水俣病」——未来への教訓 原田正純 75

ある精肉店の話 瀬瀬あや 83

今も繰り返えられる「国家の嘘」に、どう向き合い、見抜き、抗うのか 田中伸尚 105

われら64歳 朝焼けを生きる 落合恵子 114

第2章 抵抗への招待 145

高田渡のダンディズム	井上陽水・小室等	147
「そんなこと考えたこともなかったな」	矢野顕子	161
「マコトちゃん」の話題はタブーでした	湯浅誠	172
自分は無力であることを自覚する	山田太一	182
日本人が「イムジン河」を歌う違和感	小室等・李政美	192
慰安婦の真実を描き問う、日本人の自我	梁石日	238
沖縄が「日本国」から自立する思想	新川明	245

佐高信の緊急対論50選・人の巻

誰が平和を 殺すのか

佐高信

七つ森書館



2

ISBN978-4-8228-1418-2

C0036 ￥1200E



1920036012008

定価1200円+税

七つ森書館

佐高信の緊急対論50選・人の巻

誰が平和を殺すのか

佐高信

七つ森書館

佐高信の緊急対論50選・人の巻

誰が平和を殺すのか 目次

巻頭スペシャル対論 亀井静香が問うニッポンのいま 亀井静香 13

第1章 国家の嘘を見抜く 53

『神聖喜劇』にみる上級者無責任論 大西巨人 55

こんなにもバカにされているのに、なぜ? ピーター・バラカン 65

「水俣病」——未来への教訓 原田正純 75

ある精肉店の話 瀬瀬あや 83

今も繰り返えられる「国家の嘘」に、どう向き合い、見抜き、抗うのか 田中伸尚 105

われら64歳 朝焼けを生きる 落合恵子 114

第2章 抵抗への招待 145

高田渡のダンディズム	井上陽水・小室等	147
「そんなこと考えたこともなかったな」	矢野顕子	161
「マコトちゃん」の話題はタブーでした	湯浅誠	172
自分は無力であることを自覚する	山田太一	182
日本人が「イムジン河」を歌う違和感	小室等・李政美	192
慰安婦の真実を描き問う、日本人の自我	梁石日	238
沖縄が「日本国」から自立する思想	新川明	245

はじめに

六月に和歌山に講演に行った時、帰りに新大阪駅で新幹線に乗ろうとして、バツタリ、亀井静香さんに会った。そして、東京までの二時間余りを二人で話してきたのだが、時折り通りかかる人が、

「エッ」

というような顔で見て行く。

多分、亀井さんと私の組み合わせが意外なのだろう。

それで私は、自民党、社会党、新党さきがけの、いわゆる「自社さ」政権が誕生した時、社会党と会派を組んでいた参議院議員の國弘正雄さんが、

「政治は、時に“strange bed fellow”つまり、奇妙な同衾者を生む」

と言っていたのを思い出した。

同時通訳者としても名高い國弘さんらしい言葉である。

当時、亀井さんは自らを「ハトを守るタカ」と称していたが、亀井さんは両面を持っている。

悪いことができない人はいいいことでもできないのであり、この逼迫した状況下に両方できる人として亀井さんに登場してもらった。この本のための巻頭対談である。

亀井さんが自民党にいたころは、青嵐会の後を継ぐ国家基本問題同志会などをつくって、右翼的言動を繰り返してもいた。それについては私も激しく批判したが、イラク戦争の時には、加藤紘一さんなどと一緒にイラクへの自衛隊派遣を延長しないよう、当時の小泉首相に申し入れたりもしている。

亀井さんで一番驚くのは、筋金入りの死刑廃止論者であること。廃止を推進する議員連盟の会長として、森山（真弓）法相が続けて死刑を執行した時には、

「大臣はすべからく現場に出ることが大切なのだから、どうしても死刑を執行したいなら、それに立ち会え」と言ったという。

この、至極もつともな提案には、彼女は答えられなかったとか。

二〇〇五年には土井たか子さんらが呼びかけ人の「憲法行脚の会」に招かれ、土井さんと憲法論議をしている。

亀井さんは、二〇〇一年秋に、ある雑誌で次のように日本の経営者を批判しているが、残念ながら経営者の質はさらに悪くなっていると言わざるをえない。

「例えば日立でも東芝でも大量のリストラをするでしょう。昔から不景気のときでも、経営者は歯を食いしばって従業員を解雇しないで、日立一家とか東芝一家といって我慢してきた。ところがいまは余剰人員を吐き出すのが構造改革だといってリストラをする。リストラをすれば株価は上がる、そんな簡単な分析がまかり通っている」

久保田万太郎の「何もかも昔の秋の深きかな」を引いて「昔」を持ち上げるわけではないが、たとえばトヨタで、かつて、大量の首切り（いまどきはリストラという）をやった時、社長は自らの首も切った。

ところが、日立でも東芝でもパナソニックでも、首切りという最も安易な再建策をあたかも自分の手柄のようにして居すわる。鉄面皮も甚だしいと言わなければならない。だから、亀井さんに次のように詰なられるのである。

「自らニュービジネスを創設して余剰人員を吸収するといった努力をするなら話はわかるが、それもしないで簡単に従業員の首を切って政府に突き出して、失業保険などで面倒をみるというのでは、いくら理想論を言ったって大きな政府にならざるをえないじゃないか。改革とは逆なことを民間の経営者たちは堂々と『そのけそのけお馬が通る』でやっている。それが企業が身軽になるアメリカ的経営であるというんですからね」

正論だろう。しかし、いまはそれが「異論」として脇に押しやられる。

亀井発言の中の「民間の経営者」で一番無責任なのが、あるいは銀行のトップかもしれない。亀井さんの弾劾は続く。

「日本の資本主義はもう死んでいますよ。原始時代に返っているんだ。だって金融がなくなっってしまったんだから。金融のない社会というのは原始社会です。貸したり借りたりして経済が動いていなければ資本主義は成り立たない。それが『貸しません』となれば、もう物々交換の経済でしょう」

亀井さんは死刑廃止論者だけに、その首切り反対論には迫力がある。

最後に、亀井さんだけでなく、この本への収録を認めて下さった対論者のみなさんに、改めてお礼を申し上げたい。

二〇一四年十月六日

佐高信